

[課題演習報告]

学年のチーム力を育てる組織運営に関する研究 —学習指導をコアとした学年協働体制の仕組みづくりを通して—

神 代 純 子

Junko KOJIRO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻スクールリーダーシップ開発コース
学校運営リーダープログラム
那珂川市立安徳南小学校

(2024 年 1 月 10 日受理)

本研究は、学年内に「学習指導体制部」「ICT活用部」「学力基盤部」といった学習指導をコアとした学年協働体制を位置づけ、学年運営のマネジメントを行っていく仕組みづくりを通して、学年のチーム力を育てる組織運営の在り方を究明していくことを目的としている。そこで、学年内に目的共有、相互作用、価値創造という望ましい変容が生み出されるために、学習指導体制による様々な授業形態の実施を行い、学年会で授業について提案・相談・アドバイスを行う仕組みづくりを行った。また、学年経営案の活用や、部会共有シートを活用した部会と学年会の連動を図り、学年協働体制における学年運営のマネジメントを行った。

その結果、構成員の学年運営への参画意識が高まり、目標の共有、協働的な実践、実践における評価・改善を主体的に行う学年運営が展開され、学年のチーム力を育てることができた。

キーワード：チーム力、目的共有、相互作用、価値創造、学年協働体制、学年運営のマネジメント

1 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

近年の社会の急速な変化や子供たちの多様化に伴い、学校教育の役割は拡大している。その一方、教師不足の現状から、学校運営面や教育内容の質の維持向上の面で課題がある。そのような状況の中で、令和4年12月の中央教育審議会答申の中では、「子供たちの学び（授業観・学習観）」とともに教師自身の学び（研修観）も転換し、『新たな教師の学びの姿』（個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じた、『主体的・対話的で深い学び』）を実現¹⁾と述べられている。また、「学校管理職のリーダーシップの下で、目標の明確化、心理的安全性の確保、教職員の経歴・背景の多様性を考慮したマネジメントも不可欠である。特に『心理的安全性』の確保は、様々な課題に対応できる質の高い教職員集団を形成するために不可欠である」²⁾といった多様化した教職員集団のマネジメント

についても述べられている。

那珂川市においても、学校教育の重点として「専門性の高い教職員の育成」「ICT教育の推進等による確かな学力の育成」「令和4年度より高学年における学級担任間の交換授業の推進」を掲げている。

この主題で実践に取り組むことは、社会の要請を踏まえると共に、那珂川市の要請に応えるものである。

(2) 在籍校の実態から

在籍校は、児童数569名、教員数35名の規模校である。学級数は、24学級で、各学年3学級と特別支援学級が6学級ある。今後、若年・中堅教員の育成が課題となってきた。またICT教育の推進などに伴い、どの年齢層においても学びの場が必要である。さらに児童の学力格差や配慮を要する児童の増加といった実態から組織的に対応することが必要である。このようなことから、在籍校の経営課題の1つとして「学年チームの指導体制の構築」が挙げられている。そこで、1年次においては次のように研究を推進した。

(3) 1年次の研究の概要

曾余田(2010)は「学校教育目標の目的を達成するためには個々単独の力量のみに頼るのは限界だ」³⁾と述べている。この論に基づき、1年次においては、学年のチーム力を育てるために、学習指導体制と学年運営体制といった2つの学年協働体制を構築した。学習指導体制においては、「交換授業」や「合同授業」などの授業形態に応じて学年の構成員の役割を決定した。授業については、学年会の中で提案や相談、アドバイスをを行った。学年運営体制においては、学年のすべての構成員を主務者とすることができるよう「運営推進担当」「学力推進担当」「ICT推進担当」を学年内に位置づけた。このような仕組みづくりを行ったことで、学年の構成員の学年運営への参画意識を高め、学年で相互補完し合うことができた。その一方、学習指導体制と学年運営体制の関連性が明確でないことや、各学年の取組において目的の共有、評価・改善が十分に実施できていないといった課題も明らかになった。そこで、今年度は学習指導をコアとした学年協働体制の仕組みを再構築すると共に、学年経営案を活用しながら、学年運営のマネジメントを行うことで学年のチーム力をより一層育てることを目的として、本主題を設定した。

2 研究主題・副題の意味

(1) 「チーム」とは

福岡県教育センター「学校変革の決め手学校のチーム化を目指すミドルリーダー20の行動様式」の中では、次の3つの条件を満足させる教員集団のことであると述べてある。⁴⁾

- 目的共有の面から・・・重点目標や経営の重点を理解して共通実践に取り組もうとする教員集団になっている。
- 相互作用の面から・・・共通実践における成果や課題を積極的に交流し自他の取組や改善に生かそうとする教員集団になっている。
- 価値創造の面から・・・共通実践に新たな発想やアイデアを付加して、よりよい実践をつくらうとする教員集団になっている。

(2) 「学年のチーム力」とは

学年集団の構成員がもつ自律性が、学年の様々な取組で生かされることにより、すべての構成員が学年運営への参画意識をもち、目的共有、相互作用、価値創造という望ましい変容がもたらされる学年集団の総合力のことである。

(3) 「学年のチーム力を育てる組織運営」とは

学校教育目標を達成するために、学年集団の構成員が個々の能力を発揮し任された役割を遂行し、相互補完しながら協働して学年運営に参画することができるよう、マネジメントすることである。

(4) 「学習指導をコアとした学年協働体制」とは

学年内に「学習指導体制部」「ICT活用部」「学力基盤部」といった学習指導に関わる3つの担当を位置づけ、学年のすべての構成員が主務者となる役割をもつ体制のことである。学習指導体制部は学年主任が担い、様々な授業形態の実施に向けての運営や学年会の運営を行う。授業については、学年会の中で提案、相談、アドバイスをを行うと共に児童の様子も共有する。ICT活用部や学力基盤部は、各部会の内容を学年に周知したり、部会の中で学年の実態や取組を報告したりする。また、学年の課題を踏まえて積極的に取組を提案する。

(5) 「学習指導をコアとした学年協働体制の仕組みづくり」とは

学年協働体制において、学年会と各部会のそれぞれのマネジメントを行うとともに、2つの会を連動させていくといった学年運営のマネジメントを行うことである。

3 研究の目的

学習指導をコアとした学年協働体制の仕組みづくりを通して、学年のチーム力を育てる組織運営の在り方を究明する。

4 研究の仮説

学年運営において、「学習指導体制部」「ICT活用部」「学力基盤部」の3つの協働体制をつくり、学年運営のマネジメントを行っていけば、目的共有、相互作用、価値創造という望ましい変容が学年組織にもたらされ、学年のチーム力を育てることができるであろう(図1)。

図1 研究構想図



5 仮説説明のための具体的方策

- (1) 学習指導体制による授業の実施における学年運営のマネジメント
 - ① 学習指導の体制づくりと学年会の運営改善
 - ② 学習指導体制部会のマネジメント
- (2) 学年協働体制における学年運営のマネジメント
 - ① 学年経営案を活用した学年運営
 - ② 3部会の体制づくりと部会の運営
 - ③ 部会共有シートやICTを活用した部会と学年会の連動

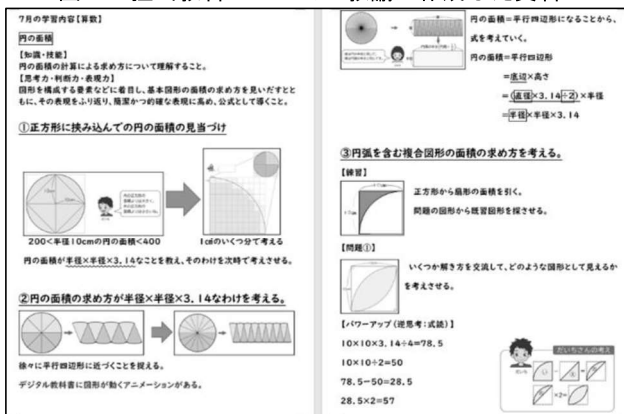
6 研究の実際

- (1) 学習指導体制による授業の実施における学年運営のマネジメント
 - ① 学習指導の体制づくりと学年会の運営改善

1年次の研究の成果と課題を踏まえながら、年度当初に、「交換授業」「合同授業」など様々な授業形態を実施していくことを全職員に周知した。また、担当者任せにするのではなく、学年会の中で授業の流れ等について提案・相談・アドバイスをを行うことを共有した。

以下6年生の実践を紹介する。6年生の構成員は教員歴38年目のA教諭が学年主任を担っている。B教諭は6年目の教員、C教諭は5年目の教員である。6年生では、社会、体育、音楽の交換授業、道徳科のローテーション授業、教科担当制の授業など様々な形態での授業を行っている。学年会では自分の担当した教科について授業の流れについて提案・相談・アドバイスをを行っている。教科担当制の授業において、6年目のB教諭が算数科「円の面積」について作成した資料（図2）を基にねらいや流れを説明していた。

図2 担当教科についてB教諭が作成した資料



説明を聞きながら、5年目のC教諭から次のような質問が出されていた（表1）。

表1 6年生の学年会（7月6日）の会話の内容（一部抜粋）

（C教諭）問題①に取り組む時は、練習で使った図を配付して重ねながら考えさせてもいいですか。
 （B教諭）たしかに実物を重ねてもできるけれど、この場合、既習図形を探して図形を求めていくような見方を育てることが大事ではないかと思います。
 （C教諭）なるほど。分かりました。

この後も、C教諭の質問に対して、B教諭は自分が実践した授業の板書をタブレットで提示しながらC教諭に丁寧に説明していた。また、学年主任のA教諭も共感的に2人の話を聞きながら一緒に学び合う姿が見られた。

交換授業においても、5年目のC教諭が担当している外国語について作成した資料（表2）を基に授業のねらいや流れを説明していた。

表2 C教諭が作成した外国語の資料（一部抜粋）

<p>6年外国語 10月の学習内容</p> <p>Unit5 We all live on the Earth.</p> <p><授業内容></p> <p>①② 生き物の暮らしについてやり取りのおおその内容を理解する。 ③ 生き物がどこで暮らし、何を食べているのかについてたずね合う。★ ④ どんな生き物が何を食べるのか、食物連鎖を意識して考える。★ ⑤⑥ 食物連鎖ポスターをグループ毎に作成する。★ ⑦ グループ毎にプレゼンテーションを行う。★ ⑧ 絶滅危惧種など環境について考え、世界日本の文化に対する理解を深める。発音アルファベット練習を行い、ペーパーテストを行う。★</p> <p>○ ★は評価に関わるところです。内容が少し難しい為、個人ではなくグループ毎に作成しようと思っています。 ○ 3人1組に分け、グループ毎に別の食物連鎖を考えさせ発表させようと思っています。</p>
--

また、授業の流れだけではなく、C教諭は「今回の外国語のテーマは児童にとって難しいテーマなのでグループでさせようと思っていますがどうでしょう」と相談をしていた。それに対しA教諭やB教諭が「自分のクラスにも外国語を話すことに苦手意識をもっている児童がいる」「グループ学習のほう学習が保障できる」といったように、実態を踏まえた授業の方向性を示していた。

学習指導体制における授業の実施において6年生の構成員は次のような感想を述べている（表3）。

表3 6年生の構成員の感想

（学年主任A教諭）
 ・各学級の児童の様子や学級経営のよさがよく分かる。学年で児童を育てることにつながる。
 （6年目B教諭）
 ・自分の担当教科について学年会で提案するので、単元を見通して教材研究を深めるようになった。
 （5年目C教諭）
 ・授業について学年会で相談できるので、安心して授業に臨める。

A教諭の感想からは組織的な生徒指導につながっていることが分かる。B教諭の感想からは授業力の向上につながっていることが分かる。C教諭の感想からは教師が安心して授業に臨めることで、余裕をもって児童に関わることができると考える。

以上のような6年生の学年会の姿や構成員の感想から、学習指導体制における授業の実施と学年会の運営改善は、目的共有や相互作用をもたらし、児童の学力面、生徒指導面にもよい影響を及ぼしていると考ええる。

②学習指導体制部会のマネジメント

学習指導体制部会は各学年主任で構成されている。部会では、年度当初に研究者が、学年会のレジュメの中に授業の進め方や児童の様子についての項目を設けることを周知し、学年会で授業について提案・相談を行ったり、児童の様子を情報交換したりすることができるようにした。また、部会の進め方については、部会の部長と相談し、各学年の実践を共有できる場にする事で、部会の内容を学年の運営改善へとつなげていけるようにした。6月の部会で、学年会の進め方の工夫について話し合った後には、次のような感想を学年主任が述べていた(表4)。

表4 部会後の学年主任の感想(一部抜粋)

・6年生が実施しているように、翌月の授業の流れを話し合う時間の位置づけや、教科を固定しての交換授業を取り入れていきたい。
・他の学年の学年会の進め方を聞いて、学年会で取り上げる内容、時間配分について見直していきたいと思う。
・この部会に参加をすると刺激を受ける。学年のチーム力向上をめざして頑張ろうと思う。

このような感想から、部会で共有したことを自分の学年にも取り入れていこうとする相互作用が生み出されていると共に、学年主任のモチベーションの高まりにもつながっていると考ええる。

7月の部会では、学習指導体制における授業の進捗状況を各学年報告し、次のような成果が共有された(表5)。

表5 学習指導体制における授業の成果(一部抜粋)

<p><交換授業></p> <ul style="list-style-type: none"> ・気になる児童を複数の担任が様子を見て、情報交換できた。 ・教材研究の時間確保と内容の充実を図ることができた。
<p><合同授業></p> <ul style="list-style-type: none"> ・統一した指導を行うことで、学級間の差がなくなった。 ・他のクラスのよさや課題を実際に見て、学級学年指導に生かすことができた。
<p><道徳科ローテーション授業></p> <ul style="list-style-type: none"> ・3回同じ授業をすることで授業改善につながった。 ・資料の提示や発問を改善することで児童から多くの考えが出された。
<p><TT授業></p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援が必要な児童にすぐに対応することができた。
<p><教科担当制の授業></p> <ul style="list-style-type: none"> ・担当の先生が指導方法について、積極的に情報を共有したこと、学年のメンバーの指導力の向上につながった。 ・1年間同じ教科を担当するのではなく、前期後半から担当教科を変えていくことで、互いの授業力の向上につながっていくのではないかと。
<p><習熟度別学習></p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童自ら3コースの中から選択したことで、それぞれの実態に合った学習ができ、意欲の向上や自信をもつことができた。

部会の中で共有することで、学習指導体制による授業において、前期後半からさらに学年会の中で提案や相談の充実を図ったり、授業形態の幅を広げたりする学年の様子がうかがえた。4年生においては表4の下線部にあるように、交換授業や教科担当制の担当教科を変えて、様々な教科について学年の構成員が学ぶことができるように工夫していた。このような姿から、学習指導体制部会のマネジメントを行ったことは、学年に相互作用や価値創造を生み出していると考ええる。

(2)学年協働体制における学年運営のマネジメント

①学年経営案を活用した学年運営

まず、1年次の課題を踏まえ研究者が管理職と相談の上、項目に3つの協働体制を位置づけたり、具体的な取組を記入したりする学年経営案の形式を作成し、日常の学年運営に活用できるようにした。次に、学年経営案評価表の作成を行い、定期的に学年運営について数値による振り返りを行ったり、成果や課題を話し合ったりできるようにした。表6は2年生の評価表の一部である。

表6 2年生の学年経営案評価表(一部抜粋)

項目	重点目標達成のための具体的な取組	5月
学習指導体制	○生活科の合同授業、道徳のローテーション授業、外国語のTTを実施し、教材研究の充実を通して、児童が自分の考えを深め表現できるようにする。	2
ICT活用	○計算ドリル、漢字ドリルの内容をタブレットによる復習を取り入れたり、図画工作科の学習でタブレットによる作品の記録や振り返りを取り入れることにより、基礎基本と技能の定着を図ることができるようにする。	2
学力基盤づくり	○那珂川スタンダードをもとに話し方、聞き方など学び方が身につくようにする。	3

この評価表を基に、2年生の学年会では次のような会話がなされていた(表7)。2年生の構成員は教員歴19年目の新任学年主任(以下D論)10年目の中堅教員(以下E教諭)3年目の若年教員(以下F教諭)である。

表7 2年生の学年会(6月7日)の会話の内容(一部抜粋)

<p>(D教諭) 学年経営案のICT活用についてはどうでしたか。私は図工の作品の記録もできず、あまり使えていないので1にしました。</p> <p>(F教諭) 私はデジタル教科書を少し活用したので2にしました。</p> <p>(E教諭) ドリルのQRコードを読み込むと漢字の書き順の学習ができることは懇談会の中で保護者にも伝えました。また、生活科の記録写真はタブレットを活用して撮りました。</p> <p>(D教諭) 教師の活用はできているが、児童が活用することはできていないということですね。タブレットを使う時間を、今後計画的に入れていきましょう。学力基盤についてはどうでしたか。</p> <p>(F教諭) 話し方、聞き方、反応の仕方は毎日指導していて、少しずつ身に付いてきたので3にしています。</p> <p>(D教諭) 反応の仕方は統一していませんがどうしたらよいですかね。</p> <p>(E教諭) 「同じです」という反応だけではなく、「ああ」「なるほど」とかいろいろな言葉を使って反応させるようにしています。</p> <p>(D教諭) 「こういう言い方があるよ」と提示していきましょう。</p>

会話の内容から、学年経営案を基に成果や課題、課題解決への方策等を積極的に述べ合う姿がうかがえた。このことは、学年全員で目的共有がなされた姿であると考ええる。

8月には、全職員で「学年チーム力に関する進捗状況報告会」を実施し、学年経営案評価表を基に、学年運営についての成果や課題について各学年から報告を行った（資料1）。その後、研究者が「今後の学年チーム力のめざす姿」の共有を行った。最後に、大学教授より各学年の実践の価値付けをしていただいた（資料2）。報告会后、次のような感想を職員は書いていた（表8）。

資料1 各学年の報告の様子



資料2 大学教授による価値づけ



表8 進捗状況報告会後の職員の感想（一部抜粋）

- ・チーム力がある学年、学校は楽しくやりがいもあるし、それが子どもたちの成長に大きくつながっていく。心して実践していきたい。
- ・日頃行っていることを自分の中で改めて価値づけることができた。今後もチームの一員として仕事をしていきたい。

このような感想から、今年度の研究の中間地点で報告会を行ったことは、職員一人ひとりの学年運営の参画意識を高めることにつながったと考える。

報告会後も、チーム力のめざす姿を日常的に意識しながら学年運営を実施できるよう、各学年の実践とめざす姿を結び付けながら、研究者が「長期派遣研修員だより」で発信していった（図3）。

図3 長期派遣研修員だより（一部抜粋）

長期派遣研修員だより

あじさい 紫陽花

令和5年11月10日発行 No.11 文責 神代 純子

学年のチーム力のめざす姿（後期）～目的共有～

後期は、前期のめざす姿に少しプラスアルファした（下線部分）めざす姿を設定していますので、改めて共有させていただきます。目的共有の姿を実際の学年の姿と合わせて紹介します。

① **学年の取組を実践している過程で見出された課題を踏まえ、学年経営案の付加・修正を行い、改善案が共有されている。**

↓ <3年生学年経営案10月の振り返りより一部抜粋>

実践の過程で定期的な学年経営案の振り返りが行われています。

① 学年の取組を実践している過程で見出された課題を踏まえ、学年経営案の付加・修正を行い、改善案が共有されている。

② 学年の中で、児童や授業等の日常的な課題及びその方策が共有されている。※目的共有②のめざす姿は前期と同じ

成果や課題、今後の見通し（改善案）が共有されています。

↓ <6年生の学年会の姿より>

算数の授業の流れについて提案を行い、単元のねらいや児童がつまづきやすい部分について学年で共有がなされていました。

12月には、全職員で2回目の学年チーム力に関する報告会を実施し、互いの学年の実践の成果を共有した。また、8月以降の実践について研究者や大学教授に加え、那珂川市教育委員会の方にも価値付けを行っていただくことで、学年のチーム力の高まりをさらに実感することができるようにした。

②3部会の体制づくりと部会の運営

学年内に学習指導体制部、ICT活用部、学力基盤部を位置づけ、すべての構成員を主務者とする仕組みを作った。そして、月に1回程度同日に3部会を行った。各部会には部長を位置づけ、研究者と相談して、各部のメンバーの意見を吸い上げながら、部会の内容を決定していった（表9）。

表9 各部会の会議の内容（一部抜粋）

月	学習指導体制部会	ICT活用部会	学力基盤部会
4月	・学年経営案の共有 ・学年会のレジュメ作成	・児童のタブレット使用時のきまりについての共有・協議	・安徳南小スタンダードによる学び方の共有
5月	・学習指導体制における授業の計画	・デジタル教科書の効果的な活用の仕方	・家庭学習について
6月	・学年会のレジュメを活用した学年会の進め方の工夫	・市のICT指標を基にしたICT活用能力の系統性	・重点目標「進んで表現」に向けた取組について
7月	・学習指導体制における授業の成果や課題	・夏休みのICT研修会の準備等	・第1回南っ子先生計画・準備

部会の運営を進めていく中で、各学年の主務者が、部会の内容を学年に周知したり、学年の取組を部会に報告したりすることはできてきた。しかし、部会の内容を生かしながら学年に取組を提案していくまでには至っていないという課題もあった。そこで、夏休み以降の部会の運営については、部会の中で学年に提案する内容も考えることができるような会の流れを工夫した（表10）。

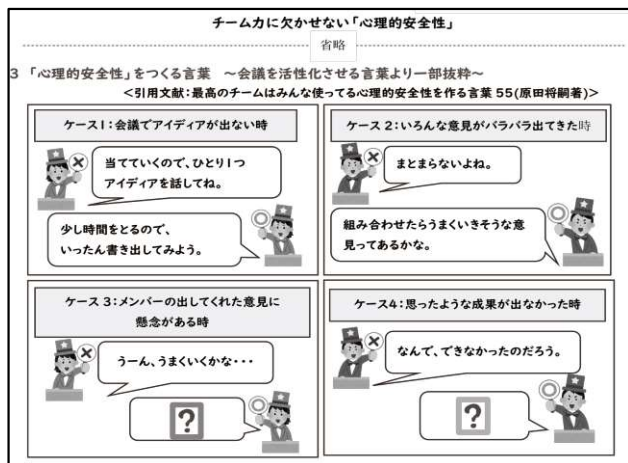
表10 8月30日実施の学力基盤部会の流れ（一部抜粋）

- <部会の流れ>
- (1) 学年経営案の「学力基盤づくり」の項目に掲げている内容を達成するために、9月に実践できそうなこと各自で考える。
 - (2) 部会のメンバーとグループで相談し、学年会で提案する内容を決める。
 - (3) 学年会で提案することの発表
 - (4) 部会のメンバーの発表を聞いている質疑・応答

部会の流れを工夫することで3年生の学力基盤部の主務者である初任者G教諭も、部会の他のメンバーの意見を参考にしながら、学年会で提案する内容を決めることができていた。部会后、G教諭は「3年生の児童は、友達の発表に反応するといったことに課題がある。授業の中で全体交流の前にペア交流を位置づけていくことを実施してはどうか」ということを提案していた。G教諭の提案を受け、他の構成員も意見を述べ合いながら、学年の課題を解決するための方策を共有することができていた。

また、学年主任で構成されている学習指導体制部会でも、「学年のメンバーの強みを生かしたり、学年会の中で全員が積極的に意見を述べ合ったりできていない」という課題が出された。学年運営のマネジメントのキーマンは学年主任である。そこで、部会の中で互いの学年の工夫していることを交流すると共に、必要に応じて研究者が資料提示を行い、学年主任のファシリテーション力が高まるようにしていった(図4)。

図4 学習指導体制部会で提示した資料(一部抜粋)



以上のようなことから、3部会の体制づくりと部会の運営を行ったことは、経験年数に関わらずすべての構成員の学年運営への参加意識を高め、学年運営において自分の役割を遂行する姿につながったと考える。

③部会共有シートや ICT を活用した部会と学年会の連動

各部の部長と研究者で「部会共有シート」を作成した。共有シートには各学年の主務者が必要な情報を書き留めておくようにした。また、各部会の記録係が会議の全体的な内容を共有シートに記録し議事録とした(表11)。議事録はタブレットで共有し、学年会の時に全員が見ることができるようにし、部会の内容を共有できるようにした。

表11 ICT 活用部会の共有シート(一部抜粋)

会議内容	<p>2 学習支援アプリの活用状況について 1～3年及び5・6年では活用ができていない。 <4年>夏休み明けから新聞作成で活用 <特支>職員間では活用しているも児童の学習での活用は学級間で差がある。</p> <p>【学習支援アプリの強みについて】 ① 児童がリアルタイムでの進捗状況がわかる。 ② 1つのシートにグループの子どもが一斉に書き込める。 ☆中学校で活用しているので、小中連携の点から活用しておく必要がある。</p> <p>3 今後 ICT 研修会で実施してほしいこと (3年生) 各学年でどこまで教えればいいのかわからないので、担任や学年によって差がある。系統性がわかるカリキュラムのような物を全体で共有してほしい。 (5年生) 子どもの立場で受ける研修が多かったため、教師側でどんな活用方法があるか教えてほしい。</p>
------	---

以下、部会と学年会の連動について2年年の実践を紹介する。

学年会では、各部会の主務者が、部会の内容を共有シートを活用して周知していた(資料3)。

また学年会のレジュメの中に「3部会の担当者より」という項目を設けていることで、部会後に内容を周知するだけではなく、日常的に取組を提案することもできる仕組みができている。ICT活用部会で「中学校で活用されている学習支援アプリが小学校ではあまり活用されていない。学年の発達段階に応じて段階的に活用を図ることが必要」ということが提起された。そこで、主務者のF教諭は2年生における活用について考え、「国語科『おもちゃの作り方を説明しよう』の単元で活用して児童に説明書を作らせていきましよう」と学年に提案した(資料4)。

提案後、F教諭が率先して授業を行い、その様子を他の構成員は参観したり、分からないところをF教諭に質問したりしていた(資料5)。その結果、どの学級でも学習支援アプリを活用しながら児童が主体的に説明書を作成する様子が見られた。さらに、この実践をF教諭はICT活用部会の中で報告した。F教諭の報告内容や実際に授業で使った資料については、部会共有シートやタブレットで共有し、

資料3 学年会で部会の内容を周知する様子



資料4 学年会で ICT 活用についてF教諭が提案する様子



資料5 F 教諭による学習支援アプリ活用の授業の様子



資料6 ICT 活用部会で2年生の実践を報告する様子



他学年の主務者が自分の学年へと広めていくことができた。6月の段階では「児童のICT活用」が課題であった2年生だったが、部会と学年会の連動を図ることで、児童一人ひとりがICTを活用して説明書を作ることができ、学年課題の解決を図ることができた。学年運営について2年生の構成員が次のような感想を述べている（表12）。

表12 2年年の構成員の感想

<p>（学年主任D教諭） <u>学年のメンバーが、率先して動いてくれる。役割分担や学年会の時間配分については迷うことがあるので、学習指導体制部会であったように今後工夫できると新しいことにも取り組みそう。</u></p> <p>（中堅教員E教諭・学力基盤部） <u>部会で話し合ったことを手がかりに学年会で「計算の手順の説明を小集団で行う」ことを提案した。実施後、単元テストの結果も伸びが見られた。今後も中堅としての役割を考え学年運営に参画していきたい。</u></p> <p>（若年教員F教諭・ICT活用部） <u>部会の中で、2年生で身に付けておかなければならないICT活用能力が明確になったので、学年でも見通しをもって取り組むことができる。</u></p>	
---	--

以上のようなことから、部会と学年会の連動は、学年内の相互作用や新たな取組の提案・実践という価値創造の姿を生み出していると考え。また、共有シートやICTを活用することで、学年間の相互作用も生み出していると考え。

7 全体考察

職員の意識調査として、「学習指導体制に関するアンケート」を実施した。また三沢ら（2009）や小島（2020）の調査を参考に「チーム力アンケート」を行った。さらに、今年度はリクルートマネジメントソリューションズ教員意識調査（2007）を用いて「仕事や職場での満足感アンケート」も行った。児童の意識調査としては、12月に「交換授業や合同授業のついてのアンケート」を全学年の児童を対象に行った。これらの結果を基に、学年のチーム力の変容についての考察を述べる。

（1）学習指導体制による授業の実施における学年運営のマネジメントに関する考察

表13 学習指導体制に関するアンケート結果 4件法
 R4 9月 N=21 R4 12月 N=22 R5 7月 N=23 R5 12月 N=24
 ※項目1はR4 9月 N=9 12月 N=12 R5 8月 N=6 R5 12月 N=12
 項目6はR5 8月 N=18 R5 12月 N=18

番号	項目（協働性に関する項目1,2,6） （学習指導に関する項目16）（生徒指導に関する項目19）	R4 9月	R4 12月	R5 8月	R5 12月
1	交換授業で担当している教科について、学年会の中で提案・相談・アドバイスをすることができている。	3.17	3.08	3.50	3.75
2	合同授業をする前に、だれが何をおこなうのかといった役割分担や授業のねらいなどを学年会の中で話し合うことができています。	3.37	3.45	3.39	3.71
6	教科担当制で担当している教科について学年会の中で提案・相談・アドバイスをすることができている。			3.39	3.78
16	授業の実施後、日常的に自分の授業の成果や課題を振り返り、次の授業に生かすことができています。	2.76	3.00	2.74	3.17
19	自分の学級の児童だけではなく、他の学級の児童に対しても褒めたり励ましたりしている。	3.43	3.45	3.48	3.67

表14 チーム力アンケート結果 4件法
 R4 9月 N=21 12月 N=22 R5 8月 N=23 12月 N=24

番号	項目（目的共有に関する項目3） （相互作用に関する項目21） （価値創造に関する項目31）	R4 9月	R4 12月	R5 8月	R5 12月
3	学年会で自分の学級の児童の課題を伝えたり、他の学級の児童の課題を共有したりしながら、一人に対応せずに組織的に対応している。	3.81	3.82	3.65	3.83
21	仕事の仕方や仕事で困ったことについて、学年会の中で相談したり、他のメンバーからの相談に答えたりしている。	3.57	3.68	3.78	3.83
31	各学級のよさや課題をみつけ、学年内で共有したり、改善案を出したりして、自分の学級や学年の取組に生かしている。	3.24	3.23	3.39	3.58

学習指導の体制づくりと学年会の運営改善を行ったことで、授業について学年会で話し合うことができ（表13項目1・2・6）学年の児童の課題を共有し合う目的共有の姿につながったと考える（表14項目3）。また、学年会の中で授業の提案・相談・アドバイスをを行ったことは、担当者任せにしないといった相互作用を生み出したといえる（表14項目21）。さらに互いの学級経営のよさや課題に気付くことができ、価値創造の姿が生み出されたと考える（表14項目31）。このことから、学年チーム力が高まったことが分かる共に、そのことが授業改善や学級を超えた児童理解にもつながっていることが分かる（表13項目16・19）。その結果、表15の「交換授業や合同授業についてのアンケート」の児童の記述内容にあるように、児童に分かりやすい授業や、様々な友達や教師とつながることができる安心感といった、児童の学力面、生徒指導面によい影響を及ぼしていることが明らかになった。

表15 アンケートにおける児童の記述内容（一部抜粋）

・交換授業では、楽しく、おもしろく、詳しく教えてもらえるから分かりやすい。
 ・他のクラスの先生ともたくさん話ができる。
 ・合同授業では、みんなで勉強するので友達がたくさんできる。いろいろな意見を聞くこともできる。
 ・合同授業だと3人先生がいるので、分からなくなったらすぐに教えてくれる。

（2）学年協働体制における学年運営のマネジメントに関する考察

まず、学年経営案の活用改善を図ったことは学年目標や取組を共有する目的共有の姿をもたらした（表16項目1）と共に、学年会で改善案を協議することから価値創造の姿を生み出したと考える（表16項目30）。次に3部会の体制づくりを行い、学年のすべての構成員を主務者としたことは、役割や責任を理解する目的共有の姿につながったと考える（表16項目8）。また、そのことが経験年数に関わらず自由に発言し合う相互作用の姿を生み出したといえる（表16項目12）。さらに、各部会の運営を工夫し、学年会との連動

を図ったことは、部会の内容を学年の取組に生かしていこうとする価値創造の姿につながったといえる（表 16 項目 33）。

表 16 チーム力アンケート結果 4 件法
R4 9 月 N=21 12 月 N=22 R5 8 月 N=23 12 月 N=24

番号	項目（目的共有に関する項目 1,8） （相互作用に関する項目 12,23） （価値創造に関する項目 30,33）	R4 9 月	R4 12 月	R5 8 月	R5 12 月
1	学年経営案の作成は互いに意見を述べながら、学年のメンバーと一緒に作成している。	2.62	2.82	3.43	3.75
8	学年のメンバーの役割と責任を明確にしたり、学年の中での自分の役割と責任を理解したりしている。	3.24	3.23	3.35	3.58
12	学年会では、メンバー全員が発言できるように工夫したり、思ったことを自由に発言したりすることができる。	3.52	3.55	3.70	3.79
23	学年のメンバーの知識や技術の向上のために、自分の強みを生かしてアドバイスしたり提案したりしている。	2.76	3.09	2.91	3.42
30	学年経営案を定期的に振り返り、成果と課題を考え改善している。	2.57	2.55	3.17	3.54
33	3 部会の取組を学年運営や学年の指導に生かし、よりよい実践をつくろうとしている。			3.22	3.54

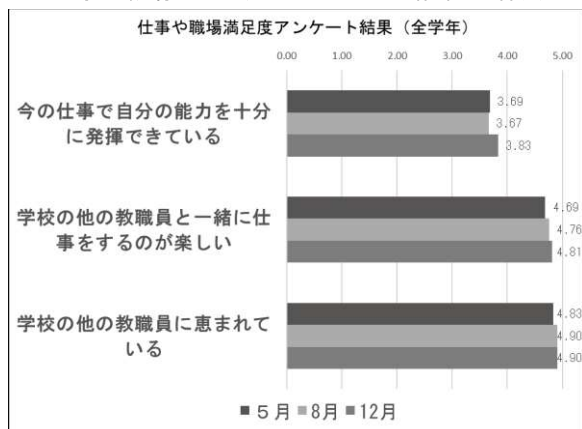
チーム力アンケートの目的共有、相互作用、価値創造のすべての項目を集計した結果は以下の通りである（表 17）。表 17 の教職員の自己評価の結果から、R4 年度に比べ目的共有、相互作用、価値創造のすべてにおいて数値が高くなっている。また、管理職からの他者評価においても数値の高まりが見られることから、学年のチーム力を育てることができたことが分かる。

表 17 チーム力アンケート集計結果 4 件法
R4 9 月 N=21 12 月 N=22 R5 8 月 N=23 12 月 N=24 管理職 N=2

対象者	教職員				管理職	
	R4年9月	R4年12月	R5年8月	R5年12月	R4年12月	R5年12月
目的共有	3.16	3.26	3.24	3.54	3.36	3.77
相互作用	3.36	3.41	3.43	3.63	3.58	3.88
価値創造	3.07	3.03	3.24	3.49	3.19	3.69

さらに、図 5 の結果から、「他の教職員に恵まれていて、仕事をするのが楽しい」と感じている職員が多いことが分かる。このことから、学年のチーム力の向上と、心理的安全性の確保は深く関連していることが明らかになった。

図 5 仕事や職場での満足感アンケート結果 5 件法 N=24



8 成果と課題

【成果】

- 学年協働体制の仕組みづくりを行ったことで、構成員による主体的で協働的な学年運営が展開され、学年のチーム力を育てることができた。
- 学年経営案を中核にした学年運営のマネジメントを行ったことで、構成員が目的を共有し、相互補完しながら学年実践や評価・改善を行い、よりよい学年実践へとつなげることができた。

【課題】

- 教職員がさらに自分の能力を発揮することができるよう、学習指導体制における授業の充実や部会の在り方の工夫・改善を図る。
- 学年の内部構成員だけではなく、担外教員や学校支援員、外部機関などとの連携を強化し、学校全体のチーム力の向上を図る必要がある。

主な引用文献・参考文献

- 1) 文部科学省 2022 中央教育審議会『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）22 頁 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00004.htm（2023 年 10 月 7 日確認）
- 2) 文部科学省 2022 中央教育審議会『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）25 頁 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00004.htm（2023 年 10 月 7 日確認）
- 3) 曾余田浩史 2010 学校の組織力とは何かー組織論・経営思想の展開を通してー 日本経営学会紀要 52 2 頁
- 4) 福岡県教育センター 2016 学校変革の決め手学校のチーム化を目指すミドルリーダー20 の行動様式 7 頁
- 小島章稔 2020 学年の「チームワーク」を高める組織運営に関する研究-学年経営案を具現化するためのプロジェクトの取組を通して- 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報第 10 号 219-226 頁
- 三沢良 2009 看護師チームのチームワーク測定尺度の作成 社会心理学研究第 24 号巻第 3 巻 219-232 頁

謝辞

本研究をまとめるにあたり、研修の機会を与えていただき、ご支援いただいた福岡県教育委員会及び福岡教育事務所、那珂川市教育委員会に心より感謝申し上げます。また、昨年度から今年度にかけて、在籍校の校長先生をはじめ、関係の先生方に多大なるご協力をいただきましたことを心から深く感謝申し上げます。